

とくいく「禅語」十六

愚の如く魯の如し（ぐのごとくろのごとし）

中国曹洞宗の開祖、洞山良价（とうざんりょうかい）の説いた『宝鏡三昧』の中に『潜行密用は、愚の如く魯の如し。ただよく相續するを、主中の主と名づく』という一節があります。「潜水艦のように人から見られないところでの行い、誰にも知られることのない行い、そういった行いを愚直に行っていく。そうした生き方の中にこそ、自分の人生を自分で生きるという主体的な生き方が現れてくる」という意味です。

真に自己を見つめて生きている人は、他人の評価ばかりを気にするがあまり、自分の信念を曲げるようなことはしません。ですが、最近では、そのような人は少なくなり、人の目ばかりを気にして行動し、陰では何をしているのか分からないといった人が多くなっているように思います。本当の善い行いとは世間の評価を基準としない「陰徳の行」といいます。

例えば掃除をするとき、表の方ばかりをよく掃除してしまうということがありませんか？人からよく見られる所、目につく所、そういった所に多くの時間を割いて、裏庭とか、人目につかない所はおざなりにしてはいないでしょうか。誰かに見られていようがいまいが、変わらずに努力を重ねることが出来るのかどうか。そういった姿勢や態度に人の真価というものは現れるものです。表裏ともに愚直なまでに何事にも平等に丁寧に取り組む姿勢が、一見平凡のように見えて実は最も地に足の着いた生き方なのではないでしょうか。

「自分は何をしたのか」「自分はどう生きたのか」に価値観を置く人は、上辺を繕うよりも実際の自分の行為に問題、意識が向くものです。たとえ人に見られないようなところでも決して手を抜くようなことはしません。他の誰かの価値観や評価に左右されて生きていくとしたら、自分とは一体何者なのかということが見えなくなります。他人の理想に合わせるのではなく、自分の理想に向かって邁進することが肝要です。

自分で自分を磨き続けられることこそが、真に自分の人生を生きたということになるのです

先日、「岡山県大会・伝統型の部」が行われましたが、参加された皆さんは、これに似たようなことを体験されたのではないのでしょうか。

競技試合である以上、相手との優劣を第三者である審判員が判断して勝敗が決まりますが、競技大会の本当の意義や価値はそんなところにあるわけではありません。日々の稽古で心と技を磨き上げて自分の理想とする型に一步でも近づくことは、相手や他人の評価との戦いというよりも自分自身との戦いになります。周りの人がどんな型を演じようとも自己を見つめ、自身が磨き上げた型を演じること。この一点に集中することが自分の能力を最大限に引き出し、自己に打ち克つ強い心を育むことにも繋がります。

平常心で全てを出し切れた時に得られる達成感と充実感は勝ち負けといった価値観を遥に越えたところにあることが実感できると思います。相対的なものではなく絶対的な自己を確立していくこと、自分の可能性を極限まで高める努力をすることが、当道場の理念でもあります。そして、それは私たちの生き方そのものにも当てはまり、豊かな人生を送るうえで、とても大切なことです。